

Nikolaus Cusanus の無知の知に就いて

川久保勘三郎

Kansaburo KAWAKUBO

序

人は伝統を固執しながら、それを破つて生れ出る新しきものを抑圧し得ず、又意識的に新しきものに向いながら伝統の拘束を免れ得ない。スコラ哲学と神秘説とに育まれ、教会に枢要の地位を占め、教理の忠実な遵奉者でありながら量と数を高調する Nikolaus Cusanus の思想の中には中世的表現の裏に後の Leibniz, Hegel の思想の芽を含んでいる。彼は中世と近世を結ぶ橋であると云える。神秘主義は一つの時代末期の現象であるが、それは同時に却つて新たなる時代の極端を形造るとも解せられる。即ち直接的な体験、生きた直観、絶対的なものとの合一、それが新たな時代を呼ぶ力でなければならない。近世は此の一面に於いては神秘主義を媒介として生れて来るのである。Cusanus の背景には神と名づけがたき神秘の闇であるという Negative theologie の伝統が見られる。彼は神に於いては闇が無限の光であるといつている。然らば如何なる点に於いて彼は単なる神秘主義者でなくして近代的哲学者であつたか。彼に於いて最も近代的なところのものは中世的なる形式論理の代りに、言わば数学的な論理が適用されているということである。神は最大なるものと同時に最小なるものであり、古き伝統をもつと同時に永き将来を含む、即ち矛盾せるものの合一であるが、この矛盾せるものの合一の思想も彼に於いては数学的に説明されている。更に此の数学的論理と結んで認識の妥当性に関する反省が自覚的に認められること、即ち多少とも認識論たることも近代的として注意されなければならない。而して之等の主として方法論的な近代的特性の外に内容的方面の特徴としては、調和した自然界の行程、個体の神への直接接近であつて、共に神秘主義に根差す Renaissance 的特徴を示している、蓋し新 Paton 派に於いて見られるように自然も又神から流れ出たものとして神性を帯び、神は万物に於いて見られ、万物は神に於いてあるが故に自然は単に否定さるべきものでなく美と調和を保ち、直接に神に触れる。それ故に教会の媒介を俟たずとも個人が直接に神に到る道が見出される。即ち中世的な階層的な思想の代りに Renaissance 的な汎神論的思想への近親性が認められる。而も彼の哲学が直接的に新しきものに向わず、伝統的なものに於いて変化と発展とを経験して、始めて新しき考へ方と問題提起とに到達したことは其の歴史的地位から見て当然のことである。

1 神に就いての考察

De docta ignorantia (*Vom Wissen des Nichtwissens*) は 1440 年に出版された。Kardinal Giuliano に献題した docta ignorantia の三巻は存在論、宇宙論、基督論から成立した一つの形而上学を含んでいる。神的なるもの、絶対的なものについての Cusanus の思索の中心は尙中世的である。併し数学的な論理を適用する点に於いて已に近世的である。而してその数学の基礎をな

すものは反対の合一の思想である。然らば反対の合一とは何か。キリスト教の信仰は神が三にして一なることを要求する。Cusanusはこの要求を満さんがために、先ず絶対の一でありながら同時に三であることを Scholatisch な論理の伝統に於いて考え、次にその数学的なる証明のために反対の合一の原理を提出した。

(a) 神が一であることについて

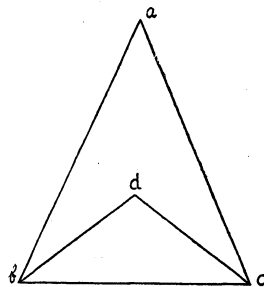
神は元より最大なるものであり、最大なるものとは存在し得る限りの凡てであるが故に当然より小なることも出来ない。而してより小なることの出来ないものは最小なるものであるから神は最大にして最小である。最小なるものは最早分割されざるものとして単一なるものであるが故に最大にして最小なる神は一なる神でなければならぬ。且つ又この一なる神は必然的に存在する神でもある。即ち神に於いては最大の存在即ち存在の絶対肯定は最小の存在即ち存在の絶対否定と相即し、それによつて矛盾されず却つて合一するからである。即ち神は凡ての存在を含み最大であると同時に最小である。而して絶対肯定は絶対否定であり、反対に絶対否定は絶対肯定であるから神は存在する (Alexander Schmid; *Nikolaus Cusanus Vom Wissen des Nichtwissens*, S. 10)。

(b) 三位一体について

神が絶対的に一であり、永遠の存在であるということは変らぬことであるから、神は常に自己自身に等しい意味になる。而してそのことは一が一に等しいということになる。そして一が一に等しいといえ、一が反復されて一から一が現われる、即ち一が一を産むことになる。而もその産出は永遠である。換言すれば父なる神が自己と全く等しい子供を永遠に産むということである。而して更に一が一に等しいことは一が一に等しいものと結ぶ即ち合一する意味である。即ち *Einheit* と *Gleichheit mit der Einheit* から *Vereinigung* が産れることである。即ち一の反復が更に反復されることである。即ち父と子が聖霊に依つて結ばれ一となることである。斯くして *Einheit* は *Gleichheit* を産み更に *einigung* を展開した。而してこの三者は何れも永遠なるものとして飽くまで唯一の永遠であらねばならぬ。何故かならば三つ異なる永遠はあり得ないからである。斯くして絶対なる神は三にして、一、一にして三であらねばならぬ (ebenda, S. 20)。

(c) 神の数学的説明

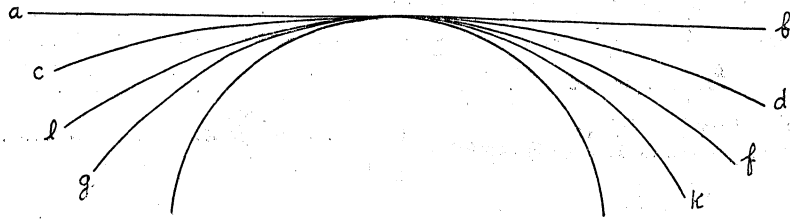
有限なる形に於いては直ちに矛盾するところのものが無限なるものに於いては互に合致する。例えば無限なる直線は無限なる三角形である。即ち有限なる三角形に於いては一辺は必ず二辺の和より小なるに拘わらず無限なる三角形に於いては三辺互に無限なる直線として無限に引き伸ばされ無限なる三線は無限なる一直線と同じ最大の直線である。故に無限なる三である。同様なことが角についても角より甚だ小さいと同様に、 $b-a$ と $c-a$ にかに大きい。それ故にこの角が大きくなる。従つて全三角形は一つの線の



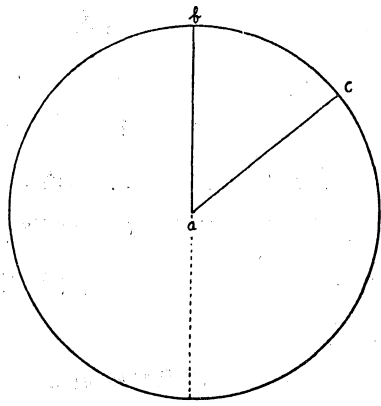
であるから斯くして最大の三角形は角形は三にして一なる神の Symbol 言える。即ち $b-a-c$ の角が二直 $a-c$ の辺は共に $b-c$ の辺より遙くなればなるほど益々平面は小さく中に溶解する。このことは有限から

無限を類推するための手助けとなる。有限量に於いては理解不可能なることが無限大に於いては必

然的であることが理解出来る。即ち無限直線は最大三角形である。(Ebenda. S.27-28)。又曲線の媒介は直線であるから無限の円に於いては直径と円周とが一致し、又無限なる円に於いては無限なる中心は無限なる円周である。換言すればどこにでも中心があることになる。更に無限線は直線であると同時に三角形、円、又は球である。更に一つの無限球を仮定するならば、同様にそれは三角形、円、及び線である。同様なことが無限三角形にも無限円についても言うことが出来る。即ち円の直径は一つの直線であり、円周は一つの彎曲である。そして正しく円周は直径より大である。もしもこの彎曲線の彎曲が小さくなるならば、その彎曲線は一つの一層大なる円周とならねばならないから最も大きな円の周辺は最も小さい彎曲となるであろう。それ故にそれは正しく直線である。ここに於いて最大と最小は一致する。



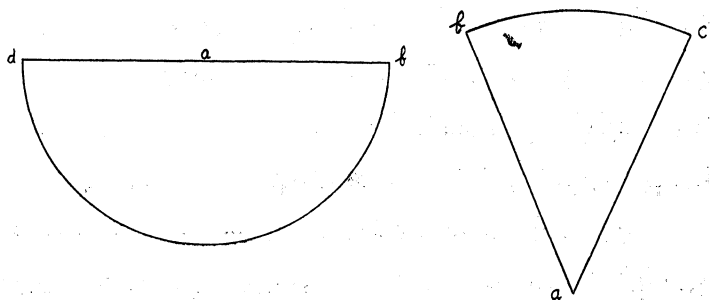
更に無限は同時に三角形で球であることについて云えば、この図に於いて a-b 線が動かされるならば、即ち b から c まで達するならば其の際 a 点は固定するのであるが、三角形が成立する。そしてもしも回転が完成するならば、即ちそこから b が出たところの点まで b が逆戻りするならば円が成立する。もしも a は動かないで b が最初の点と正反対の場所まで即ち b が d であるところまで回転するならば、a-b と a-d の線から一つの連関した線が形造られる。そうすると此処に半円が描かれる。



もしも b-d の直径を変えないでそのままにして半円が回転するならば一つの球が成立する。斯くて球は線の中に可能性としてあつたところのものが実現されたところの最後のものである。何となれば球は最早より広き図形になる可能性を自らの中に持たないからである。斯くて有限線の中に可能性として、より

広き図形があるならば、そして無限線が凡てその無限のために限定されたところの現実性の中に可能性として含まれておるならば即ち無限線は無限三角形、無限円、無限球である (Ebenda, S. 27-28)。又次のようにも言うことが出来る。

三角形 a-b-c は線 a-b の旋回即ち b が c まで達することに



よつて成立することを仮定すれば、其の際 a は固定しておくのであるが、そして線 $a-b$ が無限であるならば、そして b が完全に旋回して再び最初の b 点に到達するならば、そうすると $b-c$ が部分であるところの最大円が成立する。そして無限弓の部分として $b-c$ は一つの直線である。何となれば無限の凡ての部分は無限であるから $b-c$ は最早完全なる無限円周より小さくない。それ故に三角形 $a-b-c$ は最大円である。そして円周としての $b-c$ は一つの直線であるから無限線 $a-b$ より大きくも小さくもないである。即ち無限大より大なるものは何ものもないから無限大が二つあるはずがない。それ故に一つの三角形であるところの無限線は無限円である。更に無限線が一つの球であるということは三角形の場合と同様な意味から明らかである。即ち線 $a-b$ は最大円の円周であり、更に一つの球である。前述の如く、線は三角形に於いて b から c へ導かれる。然るに $b-c$ は一つの無限線であるから $a-b$ は c に帰する。而して円の回転によつて球が成立することは前に半形の回転について述べたのと同様の意味がある。斯くして $a-b-c$ は円であり、三角形であり、線であるから又一つの球である (Ebenda, S. 29)。斯くして反対の合一が証明され曲線は直線であり、中心は円周であり、静止は運動である。故に曲線は直線の目的であり、静止は運動の目的であり、根源である。而も中心は円周であるが故に神は万物に於いてあり、又万物は神に於いてある。神は万物に内在し、自然は神のお姿である。斯くして Cusanus に於ては汎神論的傾向にも拘らず尙神と自然との間に無限の距離がある。

II. 宇宙について

(a) Infinitum と Indefinitum

神は絶対に最大なるもの *Das konkrete GröÙte* であり、宇宙は具体的に最大なるもの *Das konkrete GröÙte* である。即ち前者は否定神学の意味に於いて否定的無限 *negative unendlich* であり、後者は単に *Privative unendlich* 独占的無限とも呼ばれる。即ち神は真の無限、円満具足の意味もあり、又最大最小の意味もある。このことは Hegel の所謂真に無限なるものと悪しき無限との区別の先駆をなすものであり、即ち前者は *infinitum* であり、後者は *indefinitum* である。後者は真に無限でなく寧ろ *endlos* である。元よりそれは有限ではなく、真の無限の模倣である。真の無限の追及であり、その写絵であり、或はその鏡である。(Ebenda, S. 64-65)。

(b) Complicatio, Explicatio, Contractio

神は世界を含むもの、そして世界は神が現われたもの、且つ制限されたものである。それは如何なる意味であろうか、神は最大の存在であるから神の外に立つ如何なる存在もない。故に神は凡てであり、凡てを含むものである。逆に言えば凡ては神の表現であるといえる。それはさながら凡ての数が一つの *Explicatio* であり、一つの発展であり、又一つの中に含まれているように或は又運動は静止の系列、其の展開であるように考えられるのに帰着する。而して特に注意すべき喩に於いて過去は嘗て現在であり、未来も臆て現在であるが故に過去と未来は現在の展開であり、現在に含まれており、時間は凡て現在の系列であると語られているのに帰せられる。併し如何にして *Infinitum* は *Indefinitum* になるか。それは純粹なる統一が多の中に於ける一となること、即ち繰返されるこ

とに基く、然らば **Einheit** が **Vielheit** に於ける一へと転廻しなければならぬが、それは一なる神が **nichts** の中に立つことによつてであり、斯くして他なる事物を現わしたことによるのである。(Ebenda, S. 69-70)。

斯く Cusanus が数を媒介として世界を考えるとところに **Pythagoras** 学派の影響が認められる。而して一なる神が無の中に踏み入ることによつて多なる事物が現われると考えられる所以は如何なる数からしても一を取り去れば、その数は無となるように凡てのものからして存在の顕現なる神を引き去れば無を余すのみなるが故である。神なき場合の物は無であるからして逆に無の中に神があるということによつて神は生ずるのである。それ故に神は存在で、凡ての物は存在を奪われたのであろうか。然らば何故に神は無の中に立たねばならぬか。それは神の意志の必然性 **Intentionale Notwendigkeit** に基くと言へるのではなからうか。

(c) Harmonie と Individualität

斯くの如く神は無の中に立つことにより宇宙となる。従つてその間には限りなき距離がある。併し神は展開すれば宇宙で、宇宙は一に帰すれば神である。その限り神と世界との間には最早 **Scholastisch** な段階的なる媒介者はない。かくして又宇宙の姿は、そのまま又万物の発現であり、かく万物を含む宇宙がそのままに神のお姿として限りなき生命を有し、即ち生きたものであり、且つ元数に依つて整えられたものとして無限の調和を示すであろう。万物は世界に於いて万物の中にあり。 **Alles in Allem** であり、万物は世界を通じて神に於いてある。斯くして自然は単に否定さるべきものでなく、神の痕跡を宿すものとなり、 **Renaissance** 的な自然神的な調和を持つ、自然はその基礎を与えられたのである。世界は最善の世界であり、最美の世界とさえ語られている。万物は万物の中にあるが故に万物は世界を反映し、大宇宙に対する小宇宙 **Makrokosmos** から **Mikrokosmos** を形成する。然るに宇宙は完全なる調和であるから個物も又それぞれの程度に於いて完全性を宿す。個物は他のものによつて交換出来ない独自性を持つ。(Ebenda, S. 67-68)

III. Docta ignorantia

(a) Sensatio, Ratio, Intellect, Intuitus-intellectulis

神から宇宙を通じて個物に到る発生の道は或いは流出の道は逆に個物から宇宙を通じて一つの神へ還元することである。このことは Cusanus の認識論に於いて明らかである。而して知識の最低段階は感覚 **Sensatio** であるが彼に於いては二つに区別されている。その一つは直接に対象と接触することによる触覚或は味覚の如き低級な感覚である。その二は比較的遠方の対象に達する臭覚、聴覚、視覚の如きものより高級なる感覚である。然し何れも対象の存在を示すだけである。其の本質の明確なる区分には到達しない。それは **Ratio** によつて初めて可能である。悟性は **Distinction Composition** 等の働きによりて、数に基いてなされる。然るに数は単なる感覚からは出ず、悟性に到つて初めて現われる。 **Pythagoras** を第一の哲学者とする Cusanus は本来の **Denken** を比較とか計算にありとした。然しかかる悟性の段階は尙矛盾律の支配する領域である。然るに理性に到れば最早矛盾律は適用されない。そこでは矛盾と考えられることが矛盾でなく矛盾の合一である。

而してこの直観が叡知的直観 *Intellectus-intellectus* である。ここに到つて我々の認識は神と合一し、かくてこの *emanatio* は完成される。それは丁度 *endlos* (*Privat unendlich*) から *unendlich* (*negative unendlich*) へ移つて行くことに比較される。然し之等の区分は絶対の壁によつて隔てられているのではなく *sensatio* と *ratio* との間に対象なくして尙対象の像をもちうるような *imaginatio* が丁度その間にあるように総じて高次の認識能力は低次の認識能力の中に現われて、それを高める働きをなすのである。つまり理性は *Ratio, imaginatio, Sensatio* の三つの *Complicatio* であり、逆にこの三つは *intellecto* の現われである。(Ebenda, S. 143-144)。

(d) *Conjectura*

かくて人間の認識は絶対的な神、最高の統一への還帰を求めるのであるが真の無限は有限に対しては全く比較を許さないものであり、我々の認識は、それに対しては無知であり、要するに推測に留まる。然し推測は単なる空想ではない、単なる疑惑でもない。それは限りなく一なるものへの接近を願いつつ而も完全性に立ち得ざるが故に、その限りに於いて推測に留まるが、限りなく十全性の接近 *approximation* を有するが故に無限なる真理への接近と考えられる。

結 び

かくて我々の認識は自己の無知を知ることによつて無限なる真理への運動となる。*Cusanus* に於いては知なる無知は聖なる無知 *Sacra ignorantia* として更に深い意味を現わしている。已に *Augustin* に於て用いられたこの *Docta ignorantia* は深く人間の知恵の無力を知ることにより神への合一を齎す聖なる無知であつた。併し又他面この *Docta ignorantia* は所謂無知の知を意味するのであつて認識に伴う各々の限界の止揚が横たわつている。その中に嘗て獲得した各段階が次の段階に依つて止揚されるところの、又最後の完成と看做されることを要求することの出来ない無限の過程を意味している。各段階は更に凌駕されなければならないところの仮定或は推測として現われるのである。

docta ignorantia 認識活動に対する刺戟として構成されるならば又時間の中に完全に満されることの出来ない理性の努力に対する刺戟として構成されるならば我々はますます絶対的真理に近寄るだろう。斯る意味に於いて知なる無知は近代的な学術の原理であり、言わば方法論的原理である。*cusanus* の *docta ignorantia* が、*sacra ignorantia* として近代学術の方法論的原理と直接連関がないとしても *cusanus* の研究は一層深く追求しなければならない深所を包蔵するのではないでしようか、この小論はその端緒に過ぎない。

参 考 文 献

Dr. Phil. Alexander Schmid ; *Nikolaus cusanus Vom Wissen des Nicht Wissens.* 1918.

Windeldand ; *Geschichte der neueren Philosophie.* 1922.

高坂正顕著 西洋哲学史入門 (近世, 現代篇)。

服部英次郎 ニーコラウス・クサーヌス 哲学研究第166号。